

臨機応変に筋を通せ！

以前勤務した学校でのエピソードです。

その学校の体育祭は縦割の4軍団編成で、その年の女子の全校団体種目は「騎馬戦」でした。その練習時のこと。

競技担当の教師と生徒会役員生徒が仕切って練習が始まりました。4軍対抗戦のため、2つのチームごとにまず2回競技をし、その結果によって、次に敗者チーム同士が、その次に勝者チーム同士が対戦し、最終的な順位を決定するという実施計画にそって練習を進めていました。

ところが全部で3回×2試合＝6試合をするのに、チームの人数はそれなりに多い上に、対戦場所や待機場所の入れ替え等の移動や帽子の数の確認等に時間がかかり、競技時間よりも移動や待ち時間が長くて、傍から見ててもピリッとしません。本番は、2回戦以降は競技結果で対戦相手が不確定なわけだし、練習と異なる想定も生じるのでなおさらです。

当時3学年主任だった私は、半ばイライラしてしびれを切らし、思わず担当の若い先生にこう言い放ったのです。

「しまりがないなあ。これじゃあ、やる方も見る方もつまらないと思うよ。別にトーナメントにしなくたって、ひし形にライン引いて、4軍一斉に帽子取り合えばいいじゃないか。それを3回戦して。移動の面倒もないし、時間も短縮できるし、作戦の楽しみもあるし、そっちの方が盛り上がると思うけど。」

「それはいいですね。」と、担当の先生も含めてそこにいた先生方のほとんどが同意してくれました。だがしかし、教務主任がそこで一言。

「全体に関わることなんで、企画委員会を通してください。」因みに企画委員会とは、学校によっては運営委員会などとも言われますが、職員会議の前裁きをする協議機関です。（え、めんどくせー。この場で変更でいいじゃん。ほとんどの先生が同意してんだから。そんな企画委員会通すほどの話？時間的な余裕もないし。）その時、私は心の中でそう思いながら、あからさまに表情を歪めました。さて、皆さんは、どうお考えでしょうか？

物事の決定プロセスはたくさんあります。トップダウン、ボトムアップ、多数決、独断、何となく、知らないうちに・・・などなど。そして、当校にも、決定や共通理解に向けた道のりとして、たくさんの協議の場があります。

職員会議、企画委員会、学年部会、教科部会、研究推進委員会、合理的配慮運営委員会、学校評価委員会、進路指導委員会、生徒指導部、いじめ対策委員会、不登校対策委員会、通知表評価評定作成委員会、GIGA スクール推進委員会、

アレルギー疾患対応委員会、働き方改革委員会、学校保健員会、学校運営協議会等々。

これらの様々な会議や協議の場の他に、これ以外の大小様々な打ち合わせを含めた情報交換・意見交換、議論、協議、熟議等を経ながら合意形成が図られ、いろいろなことが決まっています。

学校は組織体です。組織である以上、個々が自分勝手に動いてはいけません。こうしようと皆で決めたことは、教職員が共通理解を図り共通歩調をとって、学校経営や各種指導に当たらなければならないのは当然のことです。一方で、物事を進めるうちに、いろんな不都合や改善の余地が出て、臨機応変に微調整や見直しをして対応することも実際は出てきます。

ただ、臨機応変が、時として、独断専行とか行き当たりばったりとか、思いつきとかと捉えられることもあります。逆に、筋を通したことが、頭が固い、融通が利かない、などと文句を言われることもあります。柔軟対応をすべきか、原理原則を貫くべきか、物事の決定プロセスは実に悩ましいものなのです。

結論から言うと、私はどちらでもいいと思うのです。合意形成を図る場面は、何も職員会議や企画委員会等のノーマルな場だけに限られるものではありません。炉辺談話でまとまる場合も多いですし、具体的な場面に相対したその時に、いいアイデアや判断が生まれることも往々にあるのですから。

大切なことは、そういった会議や相談や話し合いの場面で、感情的でないしっぴかりした自分の意見を言えること、そして、いろいろな人への配慮です。そして、その土台として、常日頃の教職員間、あるいは事案によっては、教師と保護者との良好な信頼関係こそが必要だと思うのです。

この体育祭のエピソードに戻ると、結果的に私の提案は何事もなく受け入れられ、実際の競技もスムーズに流れて大いに盛り上がりました。しかし、私には大きな反省点があります。

一つは、各種目の競技内容は事前の企画委員会で提案されていたわけですから、そこで反論なり今回の提案は可能だったわけです。それがなされなかったのは、私が説明を適当に聞き流し、真剣に考えなかったからかもしれません。

もう一つは、当初の競技方法を真剣に練ってくれた担当の先生や生徒への謝意もなく、彼らの面目をつぶしてしまった格好になったことです。

いろいろな意見や考えをまとめることは実にたいへんなことです。だからこそ、自分の意思を明確にして声を出すことこそが肝要です。しかし、問題はその声の出し方です。いろいろな人の立場に配慮することはもちろんですが、そのものの言い方にも注意しなければなりません。これは教職員間でも、生徒と教職員、教職員と保護者間のことでも言えることです。

あの時私はこう言うべきでした。

「先生、ありがとうございます。でも時間がないし、ここにいる先生方が良案だと言ってくれているので、管理職の先生に私が説明しますから、了解がとれたら、学年主任の先生を通して全職員に周知させていただきたいのですが。」

でも当時は言えませんでした。あの時、私もまだまだ青かったのです。